
七夕—僕の願い—

天とぶ羽

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

七夕―僕の願い―

【Nコード】

N9014A

【作者名】

天とぶ羽

【あらすじ】

7月7日―七夕。織姫と彦星が年に一度再会を許された日。ロマンチックではあるけれど、その日は僕にとって、いい思い出なんか出来るはずがないんだ。

（前書き）

初投稿です。至らない点がありますが、暇潰しにでもしていただけ
たら、と思います。

もしよろしければどんな批評でも、コメントしていただけたら、と
思います。

「おい、今日は金、持ってきたんだろうな」

「…ないに決まってるだろ」

そういうとあいつらはにんまりと笑う。はい、サンドバッグ決定。
「いい加減持つてこないとねえ？」

「しかたない。解らせてやれ」

愉しそくに仕方ないと言う神経を疑いたいけれど、今はバレないように急所を外す事で精一杯だ。バレたら多分、凶器を持ち出すだろうから。

「今日はこの辺にしといてやるよ」

何がこの辺だ。僕が外してなければ…つまり普通なら死んでるぞ。僕は地面にうつ伏せでじっとしていた。動いたらあいつらはもっと攻撃するに違いない。僕はこれ以上の面倒はごめんだし、時間をくうとあいつらの命に関わる問題が頼みもしないのにやって来るだろうから。

よろよと立ち上がって制服の汚れを払う。土や落ち葉が付いていて、これを丁寧な払っておかないと、バレるからだ。髪も適当にはらって、土を落とした。

「さて、行くか」

腕や脚、体が大丈夫かどうか確認してからバッグを拾って歩き出す。目指すは、裏門だ。

「あゝ…おっそいなあ…」

そんな呟きが聞こえた。なかなかどうして、殺気が漂っているようにさえ感じる。

「お待たせ」

「遅いよ修ちゃん」

「悪い、職員室に行ってから図書室によって生徒会室と音楽室に行ったら遅くなった」

まあ、嘘ではない。

彼女は僕の頭から靴先までを眺め、それからジト目で睨みつけた。

「嘘ね」

「嘘じゃないさ」

彼女はそれでも疑っているらしく、僕の髪に手をやった。

—今日は髪だつてちゃんと払ったけど…

「…土が付いてる」

「……………嘘は吐いてないぞ」

不意に優しく、それでいて悲しそうな眼差しに変わる。

「またイジメられてたの？」

「いや、防御の練習のために有効利用させてもらってたのさ」

「…屁理屈」

僕はバックを担ぎ直して歩き出す。

「いいんだよ、別に」

「よくないよ!!」

僕の彼女の実家は空手の道場をやっていて、もちろん彼女は有段どころか数多くの大会で優勝し続けている。そして正々堂々がモットーなのでイジメなんてもってのほかだ。僕に関わった何人かは既に沈められた。

「平気だよ、これくらい。大した傷にもならないさ」

そういうと、彼女は立ち止まった。

「…なんか」

「え？」

「よくないかない！平気なんかじゃないくせに！」

…驚いた。怒ったところは何度も見たけど…泣いたところは初めてだ。

「…え、あ、ご、ごめん。僕なにか悪いことでもした？」

謝ってみたけど、彼女は一向に泣き止む気配がない。

「どうして平気なんていうの？どうして平気そうな顔してるの？そんなにぼろぼろなのに」

「…やっぱ、バレない方がおかしかったか。

今日のあいっからはいつもとは違った。なんだかやけにパンチが重いやつを連れていて、応戦できれば楽勝だったけれどそんなわけにも行かず、外す事で精一杯と言うのはそういうことだった。

「…うちにおいで、手当てしてあげる」

涙声で言われれば、したがつ他ない。僕は彼女の家にお邪魔した。そして湿布を貼ってもらいながら道場の壁に架けてあったカレンダ―に目をやった。…今日は、七夕、か…。

「はい、終わったよ」

僕があまりにぼおっとしていたせいか、彼女が顔を覗き込んできた。

「…どしたの？」

さっき泣いていたやつとは思えないほどの立ち直りっぷりを見せている。不思議そうな表情をしている。

「いや、今日が七夕だって忘れてたから」

「…そっか」

聞かなくてもわかるのだろう。彼女はうつむいた。

「…気にするなよ。もう過去の事だから」

「それは自分に言ってるの？」

「ああ、それもあるかも知れない」

七夕は嫌いだ。大嫌いだ。悪いことしか起こらない。願っても、叶わない。

「ねえ、短冊に願い事書こうか？子どもたちのはもう飾ってあるんだ」

彼女は何処からか短冊とペンを持ってきた。よく見ると、道場の隅に竹があつて、たくさんの短冊が付いていた。あれは道場の門下生達を書いたのか…

「願い事？」

「そう。これは内緒の願いだよ。一番上に飾るの。そしたら誰にも見ることは出来ないから」

「願い事なんて…」

「願い事なんてない。願いなんでない。決して叶わないと知ってしまつた。決して願いたくないと思つてしまつた。」

「…いいから、書こうよ」

彼女は強引に短冊とペンを持たせ、僕に背を向けた。…見るなつて事らしい。

―何を、書こう…―

戸惑う。何を書いていいのか、いけないのか。叶う願いを書けば良いのか？…叶わない願いなんで書けない事は、よくわかつてる。

…だけれど、彼女は僕の短冊を見るだろう。何も書いていないのでは、また泣かせるかもしれない。

僕は迷つて…今は、だからこう書こう。

『誰かの願いが、叶いますように』

（後書き）

はじめまして、初投稿を終えて後悔やら達成感やらがごちゃまぜな私ですが、いかがでしたでしょうか…？

実は何も考えず、ある曲を聴いたときパツと浮かんだ話だったの
でまとまりも何もあつたもんじゃない！！と、反省しきりです。何
でもう少し考えて行動しないんだお前は！？と言われても、仕方あ
りません…。

なので、秘話と言うほどのものをお伝えする事が出来ませんが…
ともかく、読んでくださった方に感謝と敬意を表して。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9014a/>

七夕—僕の願い—

2011年1月23日14時06分発行